第１回　北九州市後期中等教育に関する検討会議【会議要旨】

１　開催日時
　令和２年１月２４日（金）１４：３０～１７：００

２　開催場所
　小倉北区役所７１０会議室

３　出席構成員
　８名　（構成員定数８名）

４　次第
（１）教育長あいさつ
（２）構成員・事務局幹部職員紹介
（３）議事
　① 北九州市の後期中等教育の現状
　② 最近の大学・高校の改革状況
　③ 意見交換
（４）今後のスケジュール

５　会議経過
（１）教育長あいさつ
教育長　　教育長の田島でございます。
　本会議を開催するにあたりまして、代表いたしまして、ご挨拶させていただきます。
　構成員の皆様におかれましては、ご多忙のところ、この会議の構成員をお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。
　本会議の主題でございますけれども、北九州市は、後期中等教育の学校を２校持っております。
　１つが北九州市立高等学校です。実は北九州市内には北九州高校と名の付く公立学校が２校ございます。１校が私ども北九州市立、
　もう１校が福岡県立で、同じ「北九州」という名前がついていますので、地元の皆様は北九州市立高校のことを「市立高校」と呼んでおります。
　私どもも、この会議の中で、普通の言い方であります「市立高校」という言葉で、北九州市立高校のことを言う場合がございますので

ご了承ください。
　それと、この市立高校ともう１つ戸畑高等専修学校、この２校がございます。
　この２校の将来像につきまして、ご議論いただきたいということが主題でございます。
　ご存知のとおり、教育を取り巻く環境というのは、非常に変わってきております。
　その中で、特に社会状況におきましては、少子化、これは大きな要因になっているのが現状でございます。
　全国的なこの少子化の流れというのは、特に北九州市におきましては、おそらく今後も変わらないものというふうに見込んでおります。
　そういう意味で、現実的な問題といたしましては、定員充足率の問題でございます。
　本会議におきましては、現実的な足元の話ではなくて、もっと広い、抜本的な課題を２つ、考えております。
　１点目が、後期中等教育が所管ではない北九州市が、高校あるいは専修学校というものを持っている、その意義を再整理したいと考えております。
　そして２点目が、AI 化が進む社会の中で Society５．０の新しい時代がどんどん進もうとしております。
　そういう新しい時代に向けた人材育成、それを社会からの要請に応じた学校という形で受けるとしたら、どういう視点で学校を展開すべきかということです。
　こうような課題を整理いたしまして、今後の学校の方向性を定めていきたいと考え、この会議を立ち上げたところでございます。
　この会議の構成員の方々には、大学関係者あるいは産業界、また教育分野に知見のある方、そして学校現場の方、それぞれのご専門の立場からご参集をいただいております。
　ぜひ、皆様には、忌憚のないご意見をいただきまして、北九州市のこの後期中等教育のこれからの展開に、ぜひとも、知見を承りたいというふうに考えております。
　この会議は、来年度までの長丁場を想定しております。皆様方大変お忙しいとは思いますけれども、格別のお力添えを賜りますようお願い申し上げて、私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（２）構成員・事務局幹部職員紹介

資料２「有識者会議構成員一覧表」、資料３「事務局幹部職員出席者一覧表」に沿って紹介。

（３）議事①　北九州市の後期中等教育の現状について

青木教育振興担当課長より説明【資料４】

座長　　ありがとうございました。

ただいまの事務局のご説明に対しまして、ご質問ございますでしょうか。

私のほうから１点お尋ねしたいのですが、高等専修学校は、通常校でないということの、メリット・デメリットをどのように考えていますか。

事務局　　高等専修学校は、教育内容について、特化した内容を組みやすいということがあります。

当校は、服飾に関する学校としてスタートしていますので、それを期待して入る方が多いです。技能を身に付けるという意味では、普通の高校の課程を取るよりも、高等専修学校というような状況になっています。

デメリットに関しましては、特徴の裏返しになりますが、逆に高校卒業証書を得られないことに関して、少し二の足を踏むというところもあると考えています。

構成員　　今、事務局が述べられたとおりですが、戸畑高等専修学校は、本当に家政科に特化しています。

だから、「それを学習したい、学びたい」という生徒にとってはメリットのある学校です。

でも、先ほど言いましたように、高卒ではありません。

それから、その教科に縛られているというところで、今の生徒のニーズにそぐわないというか、そういうところが今段々出てきている状況です。

座長　　設置基準が緩くなる分、教員免許状不要のメリットがあるかなと

思う反面、高卒資格の問題などがやっぱり子どもたちの志願率が上がらない理由としてあるかなと思い、少し整理しておいたほうがよいかなという趣旨で質問をさせていただきました。

続きまして、議題（２）「最近の大学・高校の改革状況」のほうに移りたいと思います。
では、中村様よりご説明をお願いいたします。

議題②　最近の大学・高校の改革状況

ゲストスピーカーの中村氏より説明【資料 5】

座長　ありがとうございました。
ただいまの中村様のご説明に対しまして、ご質問ございますでしょうか。
後半にグットプラクティスとしていくつか事例をご紹介いただきました。特に探究を中核とした学校ですね、高校でも、総合的な学習の時間が総合的な探究の時間に変わるわけですが、どの時間で、その探究を進めているのでしょうか。

ゲストスピーカー　例えば青翔開智中学校・高校ですと、ここは SSH の指定校ですが、これまでは探究という別枠の時間でされていました。
今、SSH の指定校の中に取組まれているのが、「教科の学習と探究という水と油みたいな扱いになっているので、それを融合させていく、それを今挑戦している」ということで、例えば英語の授業の中で、そういう主体性とかリアル、ジェネリック・スキルみたいに言われているものをどう育てているかというふうなことも明らかにしながら、指導されているということです。段々その探究を別枠扱いではなく、教科の学習の中でもという形で、取組みを挑戦されているということでした。

構成員　今、北九州市立高校でも、２０２２年からの新学習指導要領の実施に向けて、来年入学する子どもたちが３年生の時に新課程に移行するということで、同じような取組みをやっています。普通科を例にとれば、週３２コマですね、あと科目は７校時までやるというの

を、思い切ってカットして５校時までにして、６、７の時間を使って、評価になる教科ではなくて、自分が資格を取りたいのであれば資格だとか、それから目指す大学とか医療系の大学・専門学校とかに特化して学習ができる時間にしていこうと考えています。

今、校内で検討していますが、その中で部活動もその中に入れ込んでいこうと考えています。

教員の中には、コマ数を減らすことに対して、本来高等学校の場合、最低は７４単位で卒業認定できますが、実際問題は単位制の学校以外は、それで卒業としているところはまだあまりないと思うので、減らすことに対して抵抗感がある人もいました。

その時間で生徒自身が何をやれるのか考えるという部分で、市立高校はスタディサプリを使いながら、アメリカの反転授業のような形で、事前に見て、それから授業に入る、そういったものも取り入れたいと考えています。

このような方向性というのは全国の動きからすると、間違っていないのかなと思いながら聞いていたのですが、どうでしょうか。

ゲストスピーカー　そのような探究については、生徒が主体的に考えていくことが、これから必要なことだと思います。

青翔開智中学校・高校や、三田国際学園中学校・高校に聞くと、自分で何か考えていく、これから世の中必要だなというような、肌身に感じている保護者は多いと思います。

また、ICT の活用は、大事だと思うので、時間をどうつくり出すか。ICT を大胆に活用していくことも必要なことじゃないかなというふうに思います。

構成員　大変面白い資料をありがとうございます。

特に関心があったのは、長崎大学のインタビューのサンプル問題ですけれども、これ明らかに就活の時の質問と同じですよね。

先日の TOEIC 試験の実施の延期の話もありましたけれども、全体的にビジネスのほうに通常の学問の養成機関、人材育成機関が寄ってきている傾向があります。

それに対して、今日お伺いした青翔開智中学校・高校の探究学習という形が本来の学問の在り方だと思います。

短期的な制度を求めるのではなくて、きちんと思考力なり論理性というものを鍛え上げながら、そして必要な時期にそういったもの

が役に立つ、そういう社会のほうが多分生き延びていくのだと思うのですが、違った方向性というのが今混在している感じがします。

それで、お伺いしたいのは、全体的にビジネス系の方で教育が動いていくのか、それともやはり学問の独自性というか自立性みたいなものを一方ではかなり追及して、そちらに傾いていくのか、全体の俯瞰的な見方をどういうふうに見たらよいのかというのが１つ。

あるいは、それの落としどころというか、昔グローバル型とかローカル型とかいう分け方で物議をかもしましたけれども、そういったような学校の特色として、これが２分化していくのか、その大局的な動きをコメントいただけるとありがたいです。

ゲストスピーカー　入試のところで主体性みたいなものを問われていると考えた時に、ある大学生に「高校では、学習指導要領があるから、いろんな探究や活動はできない。」と言われました。また、「大学に来たら、いろんな可能性がある。だから、高校の時は、PDCA の一回転それを経験してきてくれたら、大学でもっといろんなことができるようになる。だからそういうふうなことを大学としては求めている。」とお話をされていましたので、ある意味、高校に求められるものというと、もちろんそれが、ビジネス系の志向の方、そういう学問系の方があると思いますが、やはり自分の中で自分を自答しながら、PDCA も自分の中で回していく、それをキャリアと考えていった時に、そのキャリアオーナーシップみたいなところを高めていくということが求められていると感じます。

それは、社会の人材養成みたいな、要するに国が求めているということも、１つあるのですが、今の社会の状況で言うと、「インターネットで世界中はつながっている。それで、人口が減っているということは、人とのしがらみがなくなるということだと、そうすると、しがらみがなくて世界がつながるということは、自分が何かをしたいということであると、とても生きやすい世の中で明るい世の中なのだと、ただ、そういうふうな明るい世の中の変化と捉えられることって、やはり主体性みたいなものだ。」と言われます。

座長　この議論は、浦崎構成員のお話しの中でも関連すると思いますので、先に進めさせていただきたいと思います。

では、浦崎構成員お願いいたします。

浦崎構成員より説明【資料6】

座長　　はい、ありがとうございました。
ただ今の浦崎構成員のご説明に対しまして、ご質問はございますでしょうか。
私は、まだ昭和の感覚で、まだSociety３．０から、なかなか抜け切れてないのですが、ディマインドサイドによる「個別最適化」という方向は、どうなのでしょうか。
やっぱりサプライサイドである程度、学んでもらうべきことがあるのではと常に思うのですが、その辺りをどう考えるかと、もう１つ、「地域との関係」といった時に、北九州市というのはちょっと大きなサイズになりますので、北九州市における地域というのは、どのような単位で捉えればよいか。この２点を教えてください。

構成員　　はい、「サプライサイド」と言った時に、学ぶ内容についてはある程度、同じかと思います。
ただ、学ぶツールが個別のデバイスを使うようなことで、「自分のペースで」ということが許容されてくると理解をしています。
あるいは、自分の「探求テーマ」と紐付ける形での学びというものが許容されるという、こういう理解をしています。
次に、地域との関係になりますが、私は、学校にとっての「地域」と行政にとっての「地域」はエリアが違うという解釈をしています。
学校で授業の一環、教育課程の一環として学習活動を展開していく場合には、どうしても「学校」という拠点から徒歩、自転車で５分、１０分以内のエリアですので、戸畑区近辺ということになるかと思います。
一方で行政は、北九州市全体をどうしていけばよいのかという立場になりますので、行政にとってのエリアは北九州市全体、それは当然、授業中にはカバーできないので教育課程外、放課後とか土曜日・日曜日、それから長期休暇、それの学びのフィールドが北九州市全体になる、そういう解釈をしています。

座長　　ありがとうございます、皆さまいかがでしょうか。

ゲストスピーカー　確認ですけど、望月サテライト校ですかね、これ本校はあるので

すか。その環境はどうなっているのでしょうか。

構成員　　本校は長野県立、長野西高等学校というところがありまして、ここは通信制の学校です。
それの、あくまでもサテライト校ということです。

ｹﾞｽﾄｽﾋﾟｰｶｰ　本校も同じような形でプログラムを実施されているのですね。街中にあるという関係で、その地域連携的なところを色濃く出したのがサテライト校です。
本校のほうは、むしろ「普通により近い通信制」ということになろうかと思います。

構成員　　単位制ではなくて、通信制なのですね。

構成員　　はい、通信制です。

座長　　他によろしいでしょうか。
それでは、これから意見交換に移りたいと思いますが、まずは事務局のほうで用意していただいた論点についてご説明、お願いします。

議題③　意見交換

根橋指導企画課長より説明【資料 7】

座長　　ありがとうございました。
ただ今の、事務局からの示された論点に基づいて、ご意見を頂戴したいと思います。
では、まず１番の「北九州市が後期中等教育の学校を有している意義」につきまして、関連してご質問やご意見はありませんか。

構成員　　質問になりますが、北九州市で、この市立高校、高等専修学校が、これまで実態として担ってきた意義は、どういうところにあったのかというところが気になっています。
先ほど高校、人口増加の局面において高校設置を、高校進学率が伸びた時に、その受け皿として市立高校などを設置されているとい

うところはあったのかなというのはご説明で分かったのですが、それ以降で、単純にその量の充足という意味以外で、どういう意義を担ってきたのか、

特に、２つの観点が気になっています。まず入り口として市内、あるいは県内の、どういった生徒が今までこの市立高校だったり、高等専修学校に入学してきたのか、どういう生徒を受け入れてきたのか。

それは、もっと直接的に言ってしまうと、例えば経済的な状況だったり、ご家庭の状況だったり、そういうところも含めて、どのような教育になってきたのかという入口の部分、もう１つは出口の部分で、まさに情報ビジネスだったり、被服が、今はそのニーズだったり、社会動向の変化というところに直面しているのだと思いますけれども、過去、この北九州市において、そういった学科だったり、ある意味、特色化を図られたところで、産業界に対して担ってきた役割はどういったものであったのか。

教育長　歴史的なことについて、私から説明差し上げたいと思います。

北九州市は昭和３８年に、世界でも初と言われた５市対等合併をしております。

すでに合併すると分かっている段階で高等学校、専修学校をつくったということは、当時の戸畑市で、北九州市の中で、戸畑市を「教育の中心だ」という位置付けをしたいという意向もあったのだと思います。

歴史的にはそのような過程がありまして、５市合併したあとは、市立ということで経済的にも入りやすいという面もあり、北九州市の市民の方々にとって「北九州市の地域の学校」という位置付けで、今まできているという歴史がございます。

事務局　地元にある学校として、特にその人口が増えた時代において、子どもたちは、偏差値教育を受けてきていますので、自分たちの学力に合った学校ということで、それぞれの学校を選んでいたと思います。

特に商業科に関しては、周辺には小倉商業高校があります。門司区には門司商業高校がありましたが、今はありません。

それから若松区、八幡西区にも商業科がある高校があり、各区に

それぞれ商業科がある学校がありまして、産業を中心に、いろんな店舗なりに入って、実際に経済活動、販売などを担う方を養成するというところから、商業科が多くつくられていったと思います。

そのような中で、今だんだん、それぞれの商業科が、括り募集であったりとか、定員を減らしていっている状況があり、子どもたちも、商業科に行かなくても、職業に就けるところもあり、これまで、就きたい職業に地元で近付けるという意味で、商業科を選んでいたところが、段々変わってきたと思います。

そのため、情報ビジネス科の生徒は、卒業後は多くが就職を希望していますし、「さらに進学」というところは少し今、弱くなっているのではないかなと思っています。

戸畑高等専修学校については、そもそもが、被服ということで、当初から授業時数がそこに特化して多くなっていましたので、技術を身に付けたいというお子さんが行っていました。

その後の進路先としては、当時は就職ということが多いことから、経済的にも、家庭を助けたいというお子さんが多くおられたという状況だと思います。

ただ現在は、「その仕事がない」という場面に直面していまして、自分が学んできたこととは違う、医療系等に進む場合もありますし、一般の販売の職に就くこともありますが、なかなかその技能を活かせる場所としては今、減りつつあります。

それから周辺にも、私立の学校で服飾の学科がありますが、そこに接続する大学がありまして、その大学は、服飾系の学科募集を停止するというような状況であり、進学先もなかなか今、少なくなっているという状況を迎えています。以上でございます。

事務局　少し補足をさせていただきます。

市立高校については、部活動はかなり強いので、そこはいろんな地域から来ているというような状況です。

それ以外の学生については、近いところから来ていると考えています。

市への施策との関係については、キャリア教育のイベントとかに出店をして、そういう面でのつながりというのはありますけれども、そこには当然、他の市立高校以外の教育機関も来ているような状況です。

SDGs についても、この学校に来れば、何かそのような取組みを

やるみたいな状況には、今のところはなっていません。

座長　　はい、今、それぞれの学校の存在理由ですね、意義について説明いただきました。
　他にいかがでしょうか。

構成員　　基礎的なところを３点ほど教えていただきたいのですが。
　１つは、まず教員を独自に高校として採用できない理由は何なのかというのと、つまり中学枠と同じなのか。
　２つ目が県立高校との連携は難しいのかどうかという点です。
　それから３点目は、その中学と高校の間で異動する教員に何か法則性というか、流れがあるのかということです。
　そこは、ひょっとするとランダムなのかもしれませんけれども、ランダムだと、その全体を見渡した中での、「高校教育にあたる、中学教育にあたる」というところが難しくなるように思います。

事務局　　商業科に関しましては、ある程度規模が決まった段階で、それを満たす先生を雇用して一定数を充足していますので、それ以上の採用ができていないというのもあると思います。
　ただ、そこを解消するために県との交流人事を進めながら入れ替えをしているところですけれども、ただ、それも年齢がかなり進んでおられる方なので、難しくなっている状況はあると思います。
　それから中学校との法則性等につきましては、教職員課のほうから補足します。

事務局　　定数、異動など、教職員の人事については、実際、年齢であるとか、教科数の関係と、学校との話しあいの中で、異動することが多々ございまして、ということは、「一定の法則性があるか」と言われたら、実際はございません。
　年齢や教科等、それから中学校との交流をする場合においても、高等学校の免許を持っていることが条件としてございますので、全市的な指標において、人事異動を行っているというところでございます。

構成員　　市立高校ですと中高一貫で、中学から持ち上がりで、ずっと生徒を見ることは、生徒を育てる時に大きな力になるということはある

と思うのですが。
　よく、この先生は高校に、行ったり来たりしているような先生っていうのは、実際はいらっしゃるのですか。

事務局　　実際は、行ったり来たりということはございません。

座長　　他にいかがでしょうか。

構成員　　先ほど教育長のお話しで「少子化の中で、大きな視点から捉えて、後期中等教育に関する検討をする」とありましたが、例えばその経済性、それから時代背景というか、やっぱりその学生というか、子どもたちが少なくなってきているわけです。
　そうすると、北九州市としての経済、いわゆる費用対効果という言葉を使ってよいかどうか分かりませんが、そういう点の話も必要になるかと思います。
　例えば今回で言うと、両校の存続の問題です。
　それと、後期中等教育の在り方で、いろいろ専門の方がいらっしゃるので議論をして、これを活かすという視点と両方あるような気がします。
　その辺はどうなのでしょうか。

事務局　　はい、当然その財政的な面、そういうことも考えていかなければならないことだと思っています。
　２回目にやるか、３回目にやるかというところはありますけれど、ある程度、踏み込んだ議論をしていく必要はあるかなというふうには考えているところでございます。

構成員　　そうすると、例えば２回目以降はですね、いわゆる数字の話というのが少し出てくるのですか。
　いわゆる経済的数字、教育に関する費用の問題とか、そういう点に２回目はなるのですか。

事務局　　２回目か３回目かは、まだわかりませんが、そういう話はさせていただく予定です。公表していないデータなどもあるため、どこまで公開の場でやるか、一部非公開にするのかを含めて視野に置いております。

構成員　　学校をつくる時に、近い将来、合併するので、戸畑に商業がないのでつくっておこうとか、そういう発想があったのかもしれませんが、どちらにしても、当時は専修学校も含めて八幡製鉄の全盛時代ですから、中学を卒業して、就職をする人がたくさんいる、それから女性は家庭に入ることが多かったので、このような専修学校ができたとかいう時代背景があるのではないかと思います。

それから現代まで紆余曲折があって、今はかなり生徒数が減っているのだと思います。

一番全盛時代に学校をつくって、充実させていますから、どうしても、私立との関係などが影響してくると思うので、その辺の議論の展開になるわけですね。

事務局　　そういう議論もしないといけないとは思っております。

教育長　　構成員のご指摘のとおり、もともと歴史的に、新日鉄、八幡製鉄のお膝元だったという点は非常に大きいと思います。

被服のほうは、八幡製鉄の幹部のお子さん方が、専業主婦としても将来使える技能を身に付けるという視点もございましたでしょうし、また将来的な部分は、企業に人材を輩出するという意味もあったと思います。

この検討会議をとおして、私どもが選択と集中を最終的にする中で、その歴史的な背景、目的をすでに達成したので、これで収束を図るか、あるいは逆に、先ほどの浦崎構成員のお話にありましたように、Society５．０を見越して、昔の時代と全然違う目的をここでもう一旦、せっかくあるものですから、そういう実績も踏まえて、ここで転換期として改革に移るかというところを、ここでいろんなご意見をいただきたいというのが本質でございます。

以上でございます。

構成員　　そうすると、そういう議論をする上では、現在と将来の財政状況とかが関連しますので、その辺も今後の議論の際に教えていただければと思います。

座長　　はい、ありがとうございます。

この検討会議のミッションと言いますか、今後の方向について、

ご提案いただきました。

少し時間も押しておりますので、２番の教育内容の特色化の柱に移りたいと思います。

今、教育長の方から言われましたように、その産業構造の変化を受けて、これからどういう方向性が考えられるかについてですが、ここでも忌憚なく、ご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

構成員　先ほど浦崎構成員の話にもありましたけれども、普通科と専門科を持った学校が本当に変わりやすいのだと思います。

まさに、市立高校はそうであり、それから北九州市には、被服を専門とする学校が直近にあるというようなところで、変わりやすいというような要素を持っているのだと思います。

中学生が高等学校等を選ぶ時は、高校で、何が環境として充実しているのか、どんな学びができるのかということと同時に、もしかしたらそれ以上に、卒業後にどういう進路が開けているのかといったところが、非常に大きな選択の要素になってくると思います。

学びだけではなくて、部活動をさらに継続して、アスリートを目指したいとか、専門的なことにもっともっと深く関わっていきたいとかいう思いもあって、中学生というのは保護者の思いも含めて、高校を選択しているところですけれども、北九州市の唯一の市立の高等学校であったり、高等専修学校ということを活かす時に、市立高校の説明文章の中にもありました、「大学と専門学校との連携」というところで、いわゆるダイバーシティであると同時にコンパクトシティとして、北九州市の中に国立大学もあり、公立大学もあり、市立大学もあると。

そういった大学との連携の中で、高等学校であったり、専修学校等であったり、カリキュラムの中に組み込まれた連携での授業であったり、あるいは地域密着型の体験・経験ができていけるようなイベント等もあるということが、非常に中学生にも伝わっていくと、学びたいなという気持ちも出てくると思います。

そこで質問ですけれども、例えば、大学・専門学校との連携ということで、現在、九国大と麻生ビジネス専門学校との協定の中で、今、授業の中でも関わっているということですけれども、そういった取組みを今後、広げていくとか、カリキュラムの中にも組み入れていくことは、検討していく方向性なのか、当然そういったことも

含めて、ここで議論していくことにもなるかと思いますが、「現在のところ、どういう状況か」というところを教えてください。

事務局　市立高校は、唯一の市立高校であり、また北九州市立大学も市唯一の市立大学でございますので、学科とかの関係もあると思うのですが、連携が取れると、市が目指している「目的」とか「ねらい」で、いろんな授業とのつながりが持てるのではないかと期待はしているところです。

また、大学にはいろんな学科がございますけれども、そちらと市立高校の教育内容の整合性をどう図っていくかというのも、選択肢としてはあるのかなと考えています。

今、普通科の高等学校の、その特色化ということが言われていて、また理系・文系というところの線引きも、どうしていくかというところの見直しが考えられているところですので、そういったところも取り込みながら学科構成を考える必要があります。

今、普通科が少ない状況になって、また商業科を絞り込もうとしているところがあり、全体として減っていく子どもの数等を見ながら、どういう枠にしたらよいのかを考えつつ、大学との接続も考えていく必要があろうかと思っているところです。

事務局　先ほど、私の説明した資料７の参考にも、「地域や大学との連携の在り方」というのが４ページ目に書かれていまして、国もそういう方向へ進めようとしています。

最近は、補助金のメニューも高大接続に関するものが多くあるという状況でございます。

例えば市立の高校ですと、横浜サイエンスフロンティア高校が市立大学と組んで、市立大学の先生に、かなり授業に来てもらって、一緒にやっています。今からこのような例も研究していく必要があると考えています。

座長　大学との接続の問題について出ましたが、接続の仕方とか連携の仕方もいろいろなスタイルがあると思うのですが、大学のほうではその可能性というのは何か現時点でどうでしょうか。

構成員　それがなかなか難しくてですね、「言うとやらなきゃならんな」みたいな感じで。

一個人として言えば、もちろん取っ付きやすいところは、やっぱりその地域活動を協働でやっていくというところです。

あとは、それを単に調べて発表するだけではなくて、事前学習から実地をやって、事後学習をして、それをアーカイブにしていく、それを、また次の世代に引き継いでいくと。そういったような形で、何か形に残るものはやっておくというのが一番やりやすいと思います。

ただ、その場合には、その大学が持っている資源というのは限られていますので、そこのところ、どこがマッチングするかというのをよく考えながらやることが、必要かなというふうに考えています。

構成員　「教育の特色化」ということですけれども、学校を有している意義は何なのかということですけど、基本的に、学生が入学をしてきて、定員をきちんと埋めているということはイコール、ニーズがあるということだと思います。

ですから、安定した入試倍率というのが至上命題だと思います。

つまり、倍率が高ければ、学校は回っているので、とやかく言われる筋合いはないのです。

そういった意味では、安定した入試倍率をどうするかというところが１つのゴール、いくつかゴールはあると思うのですが、そこが一番大きいと思っています。

あと、もう１つの視点は、学校を有している意義があるかについては、逆から言えば、民間であるとか専門学校であるとか、市立でやれることなのかどうかということもあります。

つまり代替がきくのかということで、その代替がきかない強みというものをつくることがとても大事で、そこのところの差別化ですね、そこをどう図っていくのかということだと思います。

あとは結果として、有為な人材が社会に出て活躍すると、それを発信していくということが、サステナビリティというか、存続性は担保されるだろうなというふうには思っています。

座長　一番根幹のところだと思いますが、市が高校を持つということの意義を、どう市民にアピールしていくかという話になると思います。

それと、先ほど構成員からありました、これからの改革の方向性

として、経済界が求める「役に立つ」という、そういう方向の改革にしていくのか否か、それと学問的な、普遍性の確保も含めてですね、大きな議論をしていかないといけないと思いますが、それに関わって何かご意見ございますか。

構成員　私は産業界の立場ですから、会社にとって求める人材というのは、その企業に入って、成果を期待するわけですから、企業が求める人材ということになります。

ただし、学問的な普遍性の確保も、両方とも、正解なわけです。ただ、高等学校ということで、企業の戦力ということになると、商業系で言えば、簿記が分かるとか、バランスシートが読めるとか、そういうことが求められるでしょうし、昔で言えば、そろばんができて実践に強い人ということにどうしてもなると思います。

それと同時に、これは直接的に「専門教育」と言えるかどうか分かりませんが、打たれ強さも必要です。最近は、「企業に入って、１年で何％辞めた」とか、「３年で何％辞めた」というところあるので、いわゆる知的レベルの向上と同時に、その辺が強い学生というものが求められていると思います。その辺は、今、非常に企業も悩んでいます。

かなりの人が、打たれ弱いっていうか、上司から教育の一環として言われたことに対して、経験してないので、気の毒ですけれども、耐えられないために「登社拒否」というのがありますので、両方の面で、特に高校生の場合は戦力として考えて、そして、鍛えていくということが、学問的な話ではないが、大いにあると思います。

座長　その求める金の卵自体が、昭和の時代とずいぶん変わってきたと思います。

そろばんが、それほどできなくても別の形でできるでしょうし、同じように、スキル的なもので求められるニーズも変わってくると思います。「非認知型」というか、「やり遂げる力」みたいなものですね。

だから、その辺りの社会人基礎力的な、求められるコンピテンシーをどう高校教育、それは高校だけじゃなくて、小中高なのでしょうが、培っていくかについて、少し議論が必要ですね。

そもそも今回提案が挙がっている Society５．０とか、未来予測

のようなところが、本当にそうなるのか。
　そういうふうに３０年後、４０年後、５０年後って、そうなっていくという前提で話を進めてよいのかというのは悩ましい。
　我々は、これからの社会を予測しないといけませんが、予測どおりになるとは限りません。

構成員　　浦崎構成員の資料の中で「夢中は努力に勝る」という言葉が、素晴らしいなと思いました。
　やっぱり、その夢中というのは集中だろうと思います。
　この辺が欠けているという感じがしたので、そこはやっぱり企業のほうも、非常にこの言葉自体を重視というか、重要だなという感じがしました。

構成員　　少し産業分析というか、将来、どのような職業が増えていくのか、また、どのようなところが減っていくのか、その辺りを少し出していただかないと、それのどこに高校が注力していくかというのが分からないので、もう少しデータ分析をぜひお願いしたいと思います。

座長　　できるだけ居酒屋談義にならないように、エビデンスに基づいて議論できるように、ぜひ事務局のほうで、そういう資料を次回以降用意していただければと思います。

構成員　　市立高校の校長ですけれども、現在、学校を預かっている立場として、ちょっと贔屓的な話になるかもしれませんが、市立高校がある意義として、市のメリットとして、やっぱり幼小中高、特別支援学校も含めて、これを市教委で１つ持っているということが大事だというふうに思っています。やっぱり０と１というのは全然違うと思います。
　１と２の違いとは違って、０なのか１なのかという、１あれば、いろんなことを市教委も考えないといけません。教員の異動にしても、高校から中学に行く、中学から高校に行く、そういった動きもあるわけです。
　だから、全市的に見た時に、幼小中、特別支援も含めて、市立高校があるということの意義は、私はとても大きいと思います。
　私はもともと中学校採用ですので中学校での教諭として、また教

頭として、また、行政のほうの教育委員会も経験させてもらいました。

やはりこの高校の意義は、北九州市教委として、中学校に対してものが言えるとか、市教委自体もいろいろ考えないといけないところとかが出てくるというふうに思っています。

また、市のほうも、いろんなイベントだけではなくて、高校生のいろんな調査があったりしますが、そういうのは、やっぱり県立高校や私立高校はありますけれども、市立高校が一番、貢献しているのではないかなと思っています。

それから部活動にしても、本当によく頑張ってくれて、やっぱり市立高校っていうのは、市民の方の応援のしようが違います。

例えば駅伝１つ取っても、都大路走るとなった時に、役所を挙げて応援してくれています。市民の方がたくさん応援をしてくれています。

市を元気にしていくということで、おらがまちの学校、県立高校もあるのですが、やっぱり福岡県の学校なのです。

日本人の１つの国民性かもしれませんけれども、そういった帰属意識みたいなものがあって、北九州市民は「北九州市立高校」となった時に、応援するイメージというのは、県立高校とはまた違うものがあります。その辺で、市にとってみると非常に大きいというふうに思っています。

また、生徒にとってのメリットとしては、県立高校でもない、また私立でもない公立高校ということです。

先ほど浦崎構成員が言われていましたが、かなり独自性というか、公立だけれども、いろいろ市教委も配慮してもらって、ずっとやってもらっています。

例えば、市立高校には、部活の寮があります。そこまでやっているところは、あまりないと思います。それぐらい、応援もしてくれています。

だから、他の県立高校から言われると、「市立さんはいいよね」とよく言われます。

そういうところも、１校だからできることだと思います。

県立高校、９０数校ありますけれども、やはり他とのバランスとか、「あそこだけする」というのは理由付けしないといけないとか、行政も、いろいろ難しい問題があると思いますが、１校であるということで、かなり柔軟に対応してもらっていますので、うちだ

からできるような活動というのはあります。
　それから歴史的な背景をさっき教育長が言われていましたけれども、そんな流れの中で、本校に来れば、就職面では、今までのつながりというか、割と昔ながらの指導、これが良い面でも悪い面でもあると思いますが、先ほど構成員からも言われていましたけれども、昔ながらの指導の中で結構、厳しくいろんなことをやっていきますので、離職率が非常に低いです。
　だから、地場の方からは「市立高校の生徒を採れば」、「また市立高校からほしい」というニーズがあります。
　そういうつながりがあるので、中学生は、北九州で就職するなら市立高校を選んでくれていると思います。
　また、日商簿記の１級を取っている子、税理士試験の税理士の簿記部分をもう取っています。
　そういう子は最初から、自分の家庭のことをいろいろ考えて「就職だ」と、「それであれば、市立高校だ」と考えてくれています。ちなみに、この子は英語のスピーチでも、全国大会にも行っています。
　その子は、成績ではなくて、やはり「北九州で就職するなら市立高校だ」ということで、選んで来てくれています。
　そういう面で、生徒側にとってもメリットがあると思っていますので、そういうメリットを活かしながらですね、ぜひ、よい方向で活かしていただけたらと思います。
　せっかくあるものですので。

構成員　　昔の市立戸畑商業高校の時代に、私の会社が駅伝部をつくり、なかなか選手を集まらない中で、その戸畑商業の陸上部が強くなると、「私のところに入社していただいて」というのもあって、非常に感謝しています。
　やっぱり全体最適を考えた時に、そういう特徴が市民に理解を得られるとか、それから企業に理解を得られるとかいうことがあると思います。
　また、北九州市全体で考えた時に、子どもの数も減っていますし、私立高等学校との問題とかもあると思います。
　結論を急ぐわけではないですが、全体最適の議論も、多少、必要じゃないかと思います。

座長　　はい、ありがとうございます。

市立高校の受益者は、子どもたちだけではなくて、外部効果というか、近隣効果という、市にとっても非常に財産であるという話が出ました。

ただ、それ自体も、まだ PR というか、浸透の問題もあります。この会議では「魅力化をどう図っていくか」っていうことが一番のメインですので、その魅力化に向けて、ぜひまた議論を進めていけたらと思っています。

それでは、教育長から、本日の構成員の発言等を勘案しまして、感想などをお話しいただければと思います。

教育長　　様々な貴重なご意見、また、いろんな情報提供、ありがとうございました。

事務局といたしましては、淡々と「こうしたい」というところを全くお示しせずに、皆様に検討していただくという立場なものですから、市立高校の歴史等に関しましては、１つ事実といたしまして、淡々とご説明したのですが、構成員の言われるとおり、今の市立高校がシビックプライドとして、市民の方に、「北九州市立高校、ここにあり」ということを、感じさせてくれる存在であることは事実でございます。

特にそれが、例えば駅伝だとか、あるいはダンス部の、全国大会での活動などの時には、非常に市民の方から評価されまして、先ほど構成員もおっしゃられました、構成員の資料の中にもありました、「夢中は努力に勝る」という部分でいきますと、集まってくる子どもたちは本当に夢中になって、真剣に「部活動プラス、学習」ということに取組んで、人間力の向上というものにも、それが役立っているところでございます。

いずれにしましても、最終的にはドラスティックに、ゼロベースから話さないといけない話ではございますけれども、こういう後期中等教育の存在が、北九州においてどういう方向になろうとも、「魅力的な終結に結論づけられました」ということの形を取ってまいりたいと考えておりますので、ぜひよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

座長　　では最後に、今後のスケジュールにつきまして、事務局より説明

をお願いいたします。

（４）　今後のスケジュール

根橋指導企画課長より説明【資料８】

事務局　　はい、資料８をご覧ください。
　１枚紙で、検討のスケジュールが書かれているペーパーでございます。
　このあと３回程度、会議を開催しまして、８月中には方向性をまとめたいと考えております。
　２回目は、４月中旬頃と書いてありますけれども、日程調整をさせていただきまして、年度明けに開催したいと考えております。

座長　　はい、ただ今の事務局からの今後のスケジュールにつきまして、何かご意見ございますでしょうか。

構成員　　資料７の論点のところで、最後「調べておくべき事項」という、調査の件について書かれていますが、これはいつまでに行うのですか。

事務局　　準備ができるものは、第２回会議でお示しをさせていただきます。準備に時間を要するものは第３回会議になるかもしれません。

座長　　調査事項のアンケートは「年度内に」実施するイメージですか。

事務局　　学校の評価等にも使うことができると思いますので、可能な限り年度内に実施したいと考えています。
　卒業していく子たちもいますので、学生に対してや、保護者の方、それから今後、進学を目指している中学生に対して実施したいと考えています。
　実施の時期は、校長会長と相談する必要があると思いますが、年度内に実施したいと考えております。

座長　　では、よろしいでしょうか。
　それでは本日の議事は以上といたしまして、進行を事務局にお返

しいたします。

事務局　　長時間にわたり、誠にありがとうございました。

本日のご意見を踏まえ、今後の会議等を進めていきたいと思います。

本日の会議の議事録についてですけれども、冒頭でご説明しましたとおり、公開とすることとなります。

後日、事務局で作成しまして、市のホームページも掲載させていただきたいので、ご了承をください。

その際ですが、議事録の確認については座長にお願いしてもよろしいでしょうか。

それでは、議事録の内容確認は、座長に一任させていただきます。

最後になりますが、本日、ご発言ができなかったご意見等がありましたら、今からお配りする意見聴取表にご記入の上、FAX、もしくは電子メールをいただけたらと思います。

それでは、これをもちまして、第１回北九州市後期中等教育に関する検討会議を閉会いたします。

本日は、どうもありがとうございました。